

リーダーズキャンプ参加経験が学生の自己成長に及ぼす影響 — 定量的分析と定性的分析による検討 —

鵜木恵子, 松永修一, 橋本ヒロ子

I. 問題提起

この10～20年で、現代日本の産業界は、市場の飽和、競争の激化といった厳しい環境におかれるようになった。企業の生き残るためには、いかに人件費などのコストを抑え、高い生産性を上げるかが最優先される。そうした経営戦略の変更を強られる中で、企業は従来のように新入社員に長い研修を受けさせるよりも、新入社員を早期からチームの戦力とみなそうとする傾向がある。つまり、企業が新入社員に求める仕事のレベルは、10年前に比べ、より高いものになっている。人間性や基礎学力は言うまでもなく、高いコミュニケーション能力、実行力、積極性、創造力など、より実践場面で求められる能力までもが、新入社員に備わっていないと、即戦力として期待できないからだ。

一方、若者を取り巻く環境について目を向けると、2003年（平成15年）からゆとり教育の施行により、授業時間数が減少し、基礎学力の低下が指摘されている（国立教育政策研究所、2007）。そのほか、この20年間でコンビニエンスストア数は急増し、いつでも生活に必要なモノは揃うようになった。また、テレビ、ゲーム機、携帯電話の普及により、深く人と関わらずに生活できるようにもなった。つまり、現代の若者は、モノに囲まれ不自由さがない分、自分から環境に働きかけたり、創造する必要がない状況で育ち、複雑で密接な人間関係などを経験する機会は少なくなっていると言えよう。

以上をまとめると、企業は高度な実践能力を備えた“従来以上の新入社員

像”を求めるのに対し、実際に就職を希望する学生の基礎学力や実践能力はそのレベルに満たない傾向が強いといえる。

このような状況の中で、経済産業省は2005年に産学官の有識者を集め、「社会人基礎力に関する研究会」を発足した。そこでは、昨今の人材育成に関わる課題、特に若年層に不足が見られる「仕事現場で求められる能力」について検討が行われた。その結果、「職場や社会の中で多様な人々と共に仕事をしていくために必要な基礎的な力」として「社会人基礎力」の概念が発表された（経済産業省、2007）。この社会人基礎力は、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」という3つの力と、その下に12の具体的な能力要素から構成されている。

産業界が期待する人材と学生のミスマッチの時期を経て、いま若者に求められる力がなんであるかが明示されるようになった。大学機関には、単に学生に大学教育を施し、専門知識を身につけさせる役割だけではなく、今まで十分に育っていなかった学生の様々な能力、「社会人基礎力」をかつての学生以上に育成するといった役割が付加されていると言えるだろう。

本学では、2009年度に社会情報学部（現・生活情報学科及びメディアコミュニケーション学科）において、キャリア教育の一環として「リーダーズキャンプ」が行われた。このねらいは、学内の様々な行事をより活性化するため、中心となり自律的に活躍できる学生を養成することであった。また、このプロジェクト内容（後述）は、社会人基礎力を育む内容であるため、参加学生の精神的、社会的な成長が見込まれ、就職活動にも有効に作用することが期待された（松永、2010）。翌2010年度には、全学的に参加希望学生を募り、2011年2月14日から15日の1泊2日で国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて、リーダーズキャンプが実施された。

実施されたリーダーズキャンプの内容は以下の通りである。アクティブラーニング社の羽根拓也氏・得能絵里子氏が講師となり、社会人基礎力の理解を深める講義の後、ワークセッションが行われた。学生数名のグループとなり「大学を引っ張る学生リーダーとは」「社会で求められる人材とは」といった様々な問いについて意見を交換した。グループメンバーは頻回に変わるのので、初対面の学生に自分の考えを述べる機会が多かった。2日目の最後には、「大学のミッション」という課題が与えられ、グループでプレゼンター

ションを行い、勝ち抜き方式で最も優れた作品を選んだ。

Ⅱ．全体の目的

本研究では、このリーダーズキャンプに参加することで、学生の自己成長はどのように促進されるのか、定量的、定性的な分析により効果を検証することを目的としている。まず、研究1では、自己成長には様々な側面が考えられるが、社会人基礎力のうちでも「前に踏み出す力」に着目し、調査研究を行うこととした。リーダーズキャンプ参加前後で比較することで、参加学生にどのような効果が生じたかを検討する。また研究2では、参加学生のうち2人に、リーダーズキャンプ1週間前、直後、1週間後の3回、非言語的な自己表現（コラージュ制作）を行ってもらい、内的世界の変容を質的にとらえることとした。研究1と2は相互に補完的關係にある。

Ⅲ．研究1

1. 目的

3つの力の中でも、「前に踏み出す力」が最初に挙げられている理由としては、“人間が生きる上で最も基本となるのが、体力と意欲・やる気であることに大きく関わる”ことが指摘されている（経済産業省、2010）。前に一歩踏み出すからこそ、自己と環境との接触が増え、様々なフィードバックによって、自己や他者、物事への理解が深まり、広がると考えられる。つまり、他の2つの力（「考え抜く力」「チームで働く力」）の向上の基礎となるだろう。意欲・やる気に関わる側面として、本研究では自尊感情と自己効力感を検討することとした。

自尊感情（self-esteem）とは、「社会とのかかわりの中で特定の役割、価値観の達成を通して獲得される自己価値についての確信」（遠藤・井上・蘭、1992）と定義される。自尊感情の代表的な研究者である Rosenberg（1965）は、自尊感情には2つの内包的な意味があり、自分を「とてもよい（very good）」とみなす場合と、「これでよい（good enough）」と捉える場合があると指摘している。前者は、他者と比べて自分は優れているとみなすことに

より生じる感情であり、後者は人と比べて決して優れていなくとも、自分が設定した価値基準に基づいて自分を受け入れ、好意を抱き、尊重しようと思うことである。Rosenberg (1965) は、後者の考えを支持している。本研究でも、この視点に基づいた自尊感情の概念を採用する。

具体的な生活場面で考えると、自尊感情が高い人は、自身の良い面も悪い面も受け入れ、「こんな自分でよい」と評価することができ、多少の苦境にあっても自分自身を大切にすることができる。一方、自尊感情の低い人は、「自分はだめな人間だ」と自己を過少評価してしまい、生きている価値や意味を見出せなかったり、ひきこもりや不登校などの不適応を生じやすい。

また、自尊感情と関連した自己概念のひとつに自己効力感がある。自己効力感 (self-efficacy) とは「外界の事柄に対して、自分は何らかの働きかけができるという感覚」(バンデューラ, 1997) と定義される。この感覚を通して、人は自分の考えや、感情、行為をコントロールすることができる。当然のことながら、自尊感情とは相関が高いが、自尊感情が本人自身の価値に関する感覚であるのに対して、自己効力感にはある目標を達成するための能力があると捉える感覚である。つまり、「前に踏み出す力」を高めるためには、自尊感情を基礎としながらも、自己効力感の高さが必要だと考えられる。

2. 方法

- (1) 調査対象者：2010年度リーダーズキャンプ参加者87名(本学1, 2年生)に実施した。しかし、欠損値や未回答のあった16名を分析から除外した結果、71名が分析対象となった。
- (2) 調査時期：2011年2月14日のリーダーズキャンプ実施前と2月15日の実施直後の2回であった。
- (3) 質問紙調査

①自己効力感尺度

Sherer, Maddux, Mercandante, Printice-Dunn, Jacobs, & Rogers (1982) が、特性自己効力感を測定するために開発した自己効力感尺度の邦訳版を使用した(成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田, 1995)。「自分が立てた計画はうまくできる自信がある」「何かをしよ

うとしたら、すぐにとりかかる」など23項目から構成されており、「そう思う」から「そう思わない」までの5件法で回答する。

性別や年齢別においても、 α 係数は.88前後と非常に高く、主因子法の因子分析では第1因子の固有価が非常に高い1因子解が採用された。よって、信頼性・妥当性ともに高い尺度であるといえる。

本研究では、特性ではなく記入時の状態的な自己効力感を測定する必要があったため、教示文には、「ふだんの」ではなく「いま現在の」という表現に変更を行った。

②自尊感情尺度

Rosenberg (1965) が作成した自尊感情を測定する尺度の邦訳版を用いた(山本・松井・山成, 1982)。「だいたいにおいて、自分に満足している」「自分に対して肯定的である」など10項目から構成されている。内的一貫性、因子の妥当性は高いと推測されている(山本ら, 1982)。なお本研究では、事前の調査では、特性として「ふだんの」自尊感情を問う尺度と事前の「いま現在の」状態自尊感情を問う尺度を実施した。事後の調査には状態変数のみを実施した。

(4) 倫理的配慮

調査対象者には、本研究で使用されるデータは個人的な解析を行わず、統計的に処理すること、データの保存管理、及び研究終了後の適切な処理について説明を行い、同意を得た。

(5) 解析方法

結果の統計処理はすべてPASW statistics 17.0 for Windows (SPSS, 2009)で行った。

3. 結果

- (1) リーダーズキャンプ参加前の特性自尊感情得点の学年・学科での比較
まず、参加者の背景を理解するために、学年間の特性自尊感情得点の平均と標準偏差を算出した。平均(SD)は、1年(53人)が29.04(6.24)、2年(18人)は28.00(5.04)となった。次に学年間で特性自尊感情得点に差があるかを調べるために、 t 検定を行った。その結果、有意な差はみられなかった($t(69) = .64, n.s.$)。

さらに学科ごとの特性自尊感情得点の平均(SD)を算出した(表1)。人数に大きな差があったため、平均の比較は行っていないが、国文学科(4人)が25点台と低く、児童教育学科(2人)と社会情報専攻(8人)は30点以上と高かった。他の学科は28点前後であり、全体の平均(SD)は、28.77(5.94)であった。この結果は、一般的な大学生の結果とほぼ一致している(阿部・今野, 2007)。つまり、本研究の調査参加者は、一般的な大学生の特性自尊感情を持っており、学年・学科で大きな差はないことがわかった。

所属	短大			4大				全体
	国文学科	英文学科	社会情報学科	コミュニケーション学科	食物栄養学科	児童教育学科	人間発達心理学科	
人数	4	3	8	29	5	2	20	71
平均	25.75	29.33	31.50	28.38	27.40	32.50	28.75	28.77
SD	5.50	16.04	5.95	4.52	7.30	2.12	5.95	5.94

(2) リーダーズキャンプ参加前後の状態自尊感情得点の比較

分析対象は65名となった。状態自尊感情得点の平均(SD)は、参加前29.59(6.20)、参加後30.74(6.43)であった。前後の差を見るために、t検定を行った。その結果、有意傾向が認められた($t(65) = -1.95, p < .10$)。つまり、参加したことによって、状態的な自尊感情は高まったが、その差は有意傾向であった(図1)。

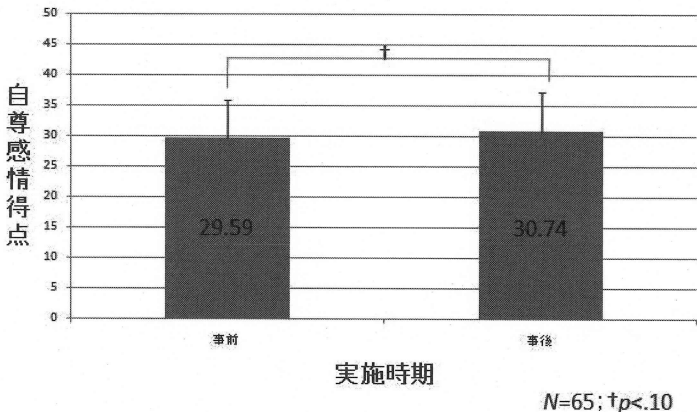


図1. リーダーズキャンプ参加前後の状態自尊感情得点の比較

(3) リーダーズキャンプ参加前後の状態自己効力感得点の比較

分析対象者は71名であった。状態自己効力感得点の平均(SD)は、参加前71.34(12.50)、参加後79.76(11.97)であった。前後の差を見るために、t検定を行った。その結果、有意差が認められた($t(70) = -6.61, p < .001$)。つまり、参加したことによって、有意に状態的な自己効力感が高まったといえる(図2)。

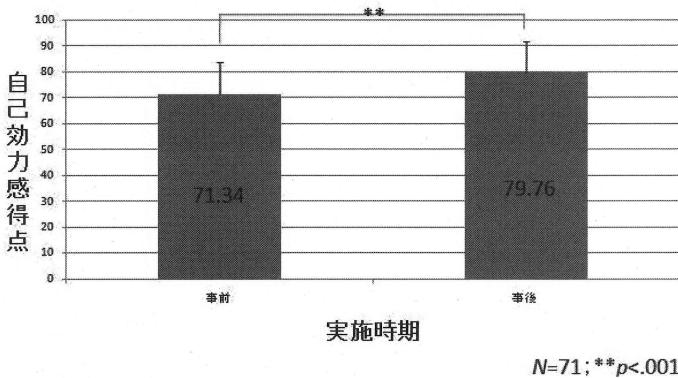


図2. リーダーズキャンプ参加前後の状態自己効力感得点の比較

4. 考察

リーダーズキャンプの参加者の特徴を理解するために、参加前の特性自尊感情を分析したところ、学年・学科での大きな差はなく、参加者は一般大学生とほぼ同レベルの自尊感情を持っていることがわかった。さらに、参加前後での状態的な変化をみるために、自尊感情、自己効力感に着目したところ、ともに参加前よりも後で高くなった。特に自己効力感では有意に得点が高くなった。つまり、リーダーズキャンプにより、「自分は何かやろうと思ったら、きっとできる」という目標を達成する意欲は高くなったことがわかった。ただし、自分自身への価値、尊重に関しては、高くはなるものの強い変容までには至らなかった。この点について、そもそも自尊感情は変容しにくい特徴があるのか、リーダーズキャンプでは向上しにくい側面であるのか、今後の検討点としたい。その他、方法上の課題も影響したと考えられる。事前の調

査用紙に、自尊感情の特性と状態の両方の側面を問う質問を提示したが、教示文を読まなかった学生は、同一の質問だと理解し、片方しか回答しなかった者が多かったため、欠損値が多くなった。今後は質問項目に工夫が必要だと考えられる。

Ⅳ．研究2

1. 目的

リーダーズキャンプに参加した学生を対象に、非言語的な自己表現（コラージュ制作）を求め、参加前、直後、参加1週間後で内的な自己世界がどのように変容するのかを分析することにした。研究1のような定量的分析では、確かに参加者全員の意識的側面を客観的に分析することができるが、学生の自己変容を理解する上では、表面的一時的な理解にとどまる可能性がある。そこで、言語のみに依存しない方法で、定性的分析も同時に行うこととした。非言語的な自己表現の方法には、コラージュ制作を選定した。そもそもコラージュとは、「雑誌などの印刷物からの切抜きを台紙に自由に貼り付けて作成する表現方法」であり、心理療法として使用する際には、その作品内容や制作行動を手がかりに制作者の内的世界や心理的状态を理解するものである（森谷・杉浦, 1999）。

2. 方法

- (1) 調査対象者:2010年度リーダーズキャンプ参加者2名(本学1年生:19歳)に実施した。2名とも、授業でコラージュ制作を体験したことがあった。なお、本研究の実施にあたっては、「継続的にコラージュ制作をしてもらい、作品の変化を見る」という主旨で参加の協力を得た。リーダーズキャンプの影響を検討するとは、参加前には伝えていないが、2人とも3回の制作を終了した後に、本来の研究目的を伝え、了承を得た。
- (2) 調査時期:参加者のうち1名(Aさん)は、参加前は2011年2月5日、参加直後は2月16日、1週間後は2月23日の3回、実施した。もうひとりのBさんは、参加前は2011年2月5日、参加直後は2月

リーダーズキャンプ参加経験が学生の自己成長に及ぼす影響

16日、1週間後は2月23日の3回、実施した。

- (3) 手続き：それぞれの学生には、事前に自分がコラージュで使用したい雑誌やパンフレットなどを持参するように伝えた。はさみ、のり、画用紙、その他の雑誌やパンフレットは、筆者が準備した。実験日当日には、実験室で個別にコラージュを制作してもらった。テーマは自由とした。時間制限は設けなかった。本人に許可をとり、制作中は制作過程（主に手元）を録画をした。制作後に作品を見て、説明をしてもらい、感想や自己評価を述べてもらった。
- (4) 倫理的配慮：研究1と同様。

3. 結果

(1) Aさんの事例

①リーダーズキャンプ参加前：1回目の感想（写真1）

制作時間は1時間14分であった。使用した画用紙は八つ切り1枚であった。

本人の感想は、以下の通りである。なお、筆者の発言は〈 〉で記述した。

スノーボードに行っていたので、左下に雪山を置いた。全体に春休みをイメージした。テーマは弱点克服（注：中央や下に弱点克服の文字あり）。海外にも行きたいと思っている。これからは1年でできなかったことを克服したい。夏休みに6キロ太ったから、春休み中にダイエットしたい。中央のタレントはかわいいから選んだ。自分。〈目は？〉こういう目になりたいと思って、貼った。自意識過剰かもしれない。

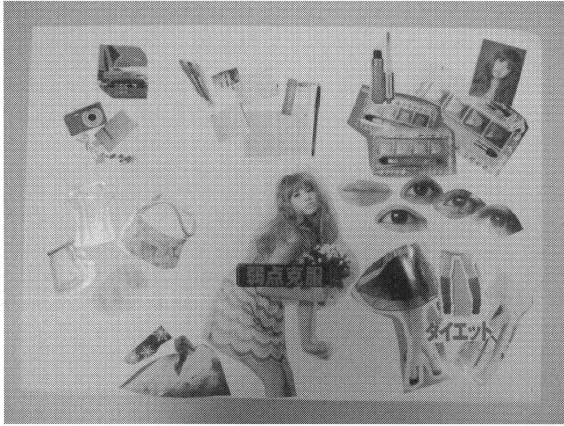


写真1. Aさんの1回目のコラージュ作品

②リーダーズキャンプ参加直後：2回目の感想（写真2）

制作時間は1時間41分であった。使用した画用紙は八つ切り1枚であった。

本人の感想は、以下の通りである。

いまの自分を表現した。予定がいっぱいあるので、時間に追われている。癒しがほしいので、自然がいっぱいにした。どこかに行きたいな～という意味で。窓の外には塔がある。動物が好きなので、癒しの感じ。<服が白っぽいけど？>何も考えてないような無になった感じ。中央の女の子は自分。ただ、画用紙の白地がなくなるまで、お花を貼りたかった。



写真2. Aさんの2回目のコラージュ作品

③リーダーズキャンプ参加後：3回目の感想（写真3）

制作時間は1時間55分であった。使用した画用紙は八つ切り1枚であった。

本人の感想は、以下の通りである。

テーマは、いまの自分、というかいま自分がなりたいと思っている自分。下中央がいまの自分。なりたいのは、今の自分よりも、もっと大人な自分。リーダーズキャンプに行ったせいか、季節のせいか、変わりたいと思うようになった。＜大人っぽい自分はどのように表現されてる？＞「オンオフ」「自分を信じる」「勉強」「成長」「CAN（できる）」といったメッセージで表現した。左上は仕事、右下が遊び。普段着ない服を着てみたい。手話検定もチャレンジする予定。下には、芽吹きがある。＜右下のフェイスマスクは？＞普段保湿シートなどしないから、自分を磨く意識を持ちたい。リップやハンドクリームも同じ意味。今回の白地は、前回ほど気にならない。でも、花があった方が瑞々しい感じがした。

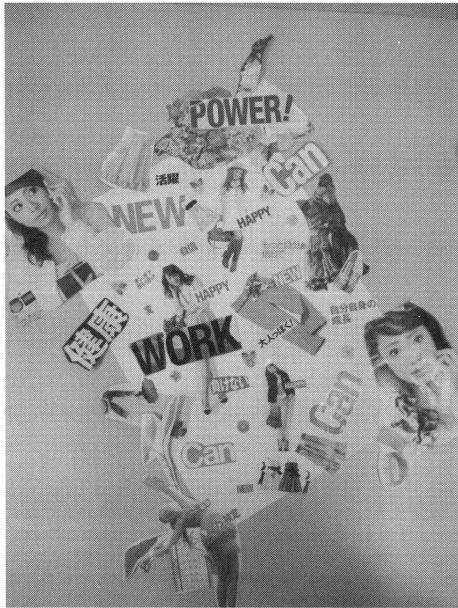


写真2. Aさんの3回目のコラージュ作品

④ Aさんの3回の作品を通して

3回の作品ともに、女の子（1・2回目の中央，3回目の下）が自分であると述べている。テーマもいまの自分が気になっていることで、ほぼ共通している。

1回目は、この春休みにしておきたい「弱点克服」がテーマだった。ダイエット（女性の足部分の切り抜き）、化粧（目とアイシャドウ）、勉強（ノート類）、海外旅行（飛行機やカメラ）、ファッション（洋服、かばん）といずれも女子大学生らしい興味の対象である。しかし、体の部分のみの表現（目だけ、足だけ）は、対人的な不安が強い場合に貼り付けられることが多く、また目のみやカメラといった切片は、「見られる」ことをAさんがかなり強く意識していることが伺える。本人の感想にも「自意識過剰」という言葉が聞かれている。弱点克服のテーマには、他者の評価を気にして、自分を外的な基準に合わせようとする姿勢が感じられた。

2回目の作品は、リーダーズキャンプ直後に制作されたが、1回目と大きく異なり、はみ出しが多い。1回目が比較的、女子大学生にありがちな内容や表現（今関心を持っている対象を並列的に配置する）であるのに対して、この回には、中心に白い服を着た女性全身像を置き、まわりに女性らしいかわいらしい小物や花を貼っている。距離感で見ると、かわいい小物は近くにあるが、女性は遠くに立っているような配置である。白い服は無になった感じとAさんが表現したように、どこか“死と再生”を予感させる（白い服は死装束を連想させ、花で画用紙の白地を埋めたかったという表現には、まさに叩うイメージがある）。この女性は手前にある大きな時計から逃げ出そうかとするようにも見え、本人も多くは予定で逃げ出したい気持ちがあったのかもしれない。右上には塔があり、1回目のような具体的な目標（例：やせる）などではなく、より抽象的で大きな目標の存在が誕生している。何か生まれ変わろうとしている気配が感じられる。白地をコントロールできなかった不安も述べられている。

3回目になると、自分の内側からの芽吹きがはっきりと見えてきている。ポジティブな言葉が踊り、社会的な役割を意識した自分の成長を望んでいることが伝わる。他者の評価による自分の容姿を気にするというよりも、自分の内面から望むものがのびやかに表現されている。人物の体の部分表現は2回目から登場せず、対人不安が低くなっている。白地があっても許容できる精神的なゆとりが生まれている。

Aさんのコラージュ作品の流れを総括すると、初めは外的な評価を基準として、自分を変えようとしていたが、リーダーズキャンプ参加直後には、精神的な内的世界が表現されるようになった。そこには、「無になった感じ」という本人の言葉に象徴されるように、どこか今までとは違う自分が生まれようとしているが、それが何だかまだ見通せていない焦りや不安も感じられる。しかし、3回目になると、はっきりと自分の中から、「こうなりたい自分」が他者にも分かりやすい“言葉”になって表されている。そこには、まわりから“見られる存在（客体）”のAさんではなく、“見る存在（主体）”としてのAさんがいる。より強い自我が誕生しようとする芽吹きが表現されていた。

(2) Bさんの事例

①リーダーズキャンプ参加前：1回目の感想(写真4)

制作時間は1時間42分であった。使用した画用紙は八つ切り3枚であった。

本人の感想は、以下の通りである。なお、筆者の発言は〈 〉で記述した。

テーマは決めず、雑誌を見て、きれいな色だと思っものを選んだ。これらで花を作りたいと思っていたが、文字が入るのは嫌だと思った。切ったものは全部使おうと思ったら、作品がどんどん大きくなった(注：切片を全部貼り付けてから、作品を支えるために画用紙を使用した)。〈左の人は?〉人として貼るのではなく、色合いで選んだ。画用紙の白地もあいていたし。この女の人は右の花を見ている。自分の存在に近い。〈右下は?〉右下からでてくる茎のようなもの。でも、風や水のような気もする。

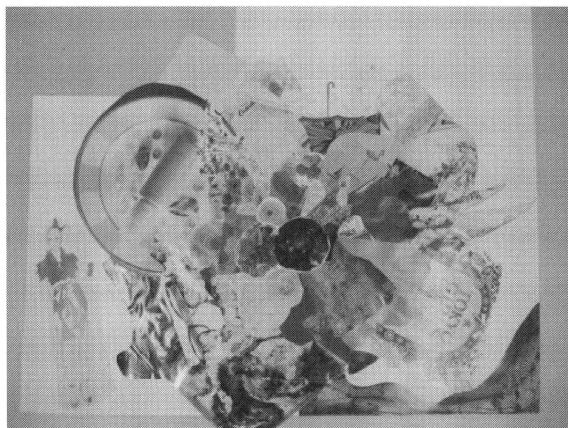


写真4. Bさんの1回目のコラージュ作品

リーダーズキャンプ参加経験が学生の自己成長に及ぼす影響

②リーダーズキャンプ参加直後：2回目の感想（写真5）

制作時間は1時間18分であった。使用した画用紙は八つ切り4枚であった。

本人の感想は、以下の通りである。

素材は、いいなと思ったものを適当に切り抜いて、今回は人が貼りたかった。はさみで切るとまっすぐになっていやなので、手で破いた。おもむくままになった。<いいなと思う基準は？>色にひかれた。笑顔ではないもの。<いまの気分に近い？>いまはあまり元気ではないかも。<ちぎったことについて？>切り口がぎざぎざになっていい。まっすぐだとつるつるして嫌だと思った。暴れたい気持ちがしたからそうした。作品全体の感想としては、めちゃくちゃに見えるけど、自分の中では統一されている。

タイトルは、箱。自分が中央の女性で、箱のそこにある。重層的に他の女性が重なっていて、一番上に手書きのメッセージがシールのように貼ってある感じ。

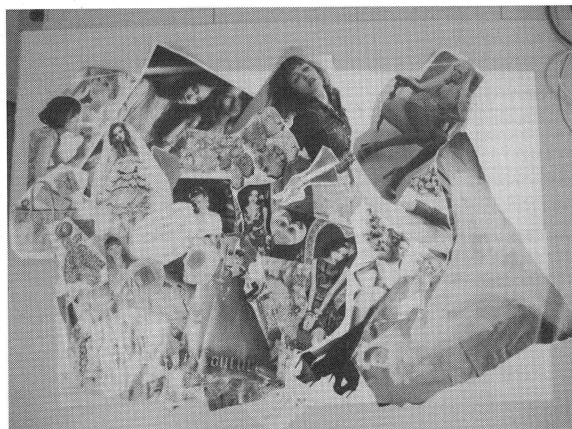


写真5. Bさんの2回目のコラージュ作品

③リーダーズキャンプ参加後：3回目の感想（写真6）

制作時間は1時間38分であった。使用した画用紙は八つ切り2枚であった。

本人の感想は、以下の通りである。

今までの2回は気に入ったものを切って作成していたが、今回は自分をテーマにした。自分の気になったものを切った。自分の名前があったので、貼っている。右下にある記事は自分の考えと似ているから。左下に結婚、赤ちゃんが貼ってある。結婚願望かもしれない。左上の叫んでいる女性も私かもしれない。ストレス発散で時々叫びたくなるから。リーダーズキャンプやピアサポーターの経験をして「生まれ変わったな」と感じる（「生まれ変わった」の活字によるメッセージ）。中央の女の子は自分。笑ってない。悩みながらも、進んでいる感じがいまの自分に近い。前は荒れていて、整理がつかない感じだったけど、今回は落ち着いている。今まではネガティブな考えからだったけど、明るくなった。友達にもそういわれる。



写真6. Bさんの3回目のコラージュ作品

④ Bさんの3回の作品を通して

1, 2回では、感覚的に気に入ったものを切り抜き、それらをすべて使って、ひとつのものに作り上げようとしていた。画用紙の大きさを見て、それに合わせる構成を考へてから、切片を貼るのではなく、切片同士を貼り合わせた後で画用紙を作品の裏支えとして最後に使用するのが特徴的であった。

1回目は、色彩に着目して、ひとつの「華」を作成した。花卉を幾重にも重ねて、抽象的な作品となっている。求心性のある構成なので、異素材が集まっても、最終的には、まとまりをみせた。自分の感覚を信じていることが伺えた。

2回目は、短時間でかなり大きな作品を作成した。作成中、手でびりびりと裂く音が響き続け、様々な女性が切り出されていく様子は、迫力があった。1回目には1人しか貼らなかつた女性が、何十と登場し、様々な向きで重なりあつていたので、混沌とした状態であった。切つたものは、使わなくても構わないのだが、全部使わないと気がすまない、選択できない側面も感じられた。「暴れたい」「荒れている」と本人が表現しているように、Bさん自身が混沌としたエネルギーに圧倒され、「整理されてない気持ち」を感じる作品となった。中央にある女性を自分と述べたものの、どこかアイデンティティが拡散しているような状態を感じた。

3回目には、1, 2回目には表現されていなかった明確な自分の存在を中央に貼っている。決して、笑っていないし、悩みもあるけれども、だからこそ等身大の自分自身に向き合っている印象を受ける。1回目には決して貼りたくないといつていた文字を貼っていた。「生まれ変わった」という文字には、リーダーズキャンプやピアサポーターといつた経験により、自己に生じた大きな変容を確認している。

(3) 考察

2人のリーダーズキャンプ参加者それぞれのコラージュ作品群を、本人の感想を通じて提示した。もちろんAさん、Bさんの個性や興味の対象は異なるが、2回目のリーダーズキャンプ直後の作品には、内的に不安定な状態

にあったことが伺える。Aさんの作品には、不安や焦りとともに、死と再生を予感させるものがあり、Bさんの場合には、攻撃性を伴った大きな混乱状態にあったようである。2人の作品に共通しているのは、何らかの力を受けて、過去の自分が破壊されるような状態、強いショック状態にあったのではないかということだ。いずれも、自分に近い存在である女性の切り抜きが、まるで申うかのように扱われている。白い衣装を着た女性を花で囲みたり（Aさん）、多くの女性の切り抜きにうずもれるように、自己像である女性が箱の底（Bさん）に位置づけられ、あたかも埋葬されているようである。しかし、3回目の作品では、いずれにも「再生」が明示されている。深い混乱を超えて、新しい自分の芽吹きを感じるような強いメッセージがこめられていた。また、今の自分と向かい合おうとする姿勢も感じられた。

V. 総合的討論

研究1では、リーダーズキャンプ参加者全員に対して、調査用紙を用いて、参加前後の自尊感情と自己効力感の比較を行った。その結果、終了直後には、「前に踏み出す力」のうち「自分はやればできる」といった目標達成に向かう力が強くなっていることが示された。現代の青年の環境は、常にサービスや商品を消費する立場にあり、自分たちが何かを生み出す経験、生産する体験が乏しい。しかし、リーダーズキャンプで問題を提起され、それについて自分で考え、他者へ表現することは、日ごろ経験しない貴重な機会だったと思われる。

自己効力感の形成にあたっては、4つの要因が指摘されている（バンデューラ、1997）。まず、「①達成体験」である。これは、自己効力感形成に最も重要な要因であり、自分自身が何かを達成したり、成功したりした経験のことをいう。次に、「②代理経験」である。①のように自分が達成・成功しなくても、自分以外の他人が何かを達成したり成功したりすることを観察することである。さらに、「③言語的説得」は、自分に能力があることを他者により言語的に説明されることであり、「④生理的情緒の高揚」は、酒などの薬物やその他の要因により気分が高揚することである。

これらの4つの要因に基づき、リーダーズキャンプ参加経験がなぜ自己効

力感を高めることになったのかを考察したい。まず、1泊2日のプロジェクトに脱落することなく参加でき、自分の意見を初対面の他者に自己表現ができたという「①達成経験」が背景にあるだろう。また、他者の意見を聞き、同年齢の他者がしっかりとした意見を持っていると理解することは「②代理経験」にもなるだろう。さらに自分の意見を他者がしっかりと聞き、肯定的な評価を得たことも「③言語的説得」となったと考えられる。このような理由で、リーダーズキャンプ参加経験が、自己効力感に作用したものと考察される。

しかし、この研究は、統制群の設定がないこと、非常に短期間の変化をとらえているため、長期にこの効果が持続するものかどうかについては言及できない点が課題といえる。現在は参加者全員に追跡調査を実施し、分析中である。今後報告することとしたい。研究2では、2人のリーダーズキャンプ参加学生に、コラージュという非言語の自己表現を行ってもらい、参加前、直後、1週間後で作品内容を比較し、内的な変容について検討した。その結果、研究1のような定量的研究では、捉えにくい側面について理解することができた。リーダーズキャンプ参加直後には、かなり強い混乱、ショック状態があり、それが1週間程度すると、明らかに「再生」という形で、新しい自我の形成を感じさせるということである。つまり、それだけ強く自我に影響を与える体験だったといえるだろう。言語のレベルでは、ポジティブな側面（自分はできるという感覚）が報告されるが、大きな変化には、従来の自己構造の破壊という痛みも伴う。ただし、健康な学生は、時間をかけてそれを消化し、新しい自分を作り出すようになる。

しかし、自我が弱い学生にとっては、この混乱期は長期化する可能性やアイデンティティの拡散状態になる可能性も考えられる。研究2の参加学生は、適応力のある大学生であったが、参加学生のパーソナリティによっては、ある程度目配りやフォローも必要だと考えられる。研究2の課題としては、あくまでも2人の学生の事例にすぎず、一般化するには困難があるという点である。今後は、手続きを工夫して、この問題点を補っていきたい。

以上、本研究では、リーダーズキャンプ参加経験が参加学生の自己成長にどのように関与するのか、定量的、定性的分析を用いて検討した。今後は、こうした経験がどのように持続するかといった要因、主に大学教員の学生へ

の関わりや学生自身の社会的体験について、縦断的な研究を行っていきたい。こうした研究を積み重ねることは、大学教育のあり方を模索するための基礎資料になると思われる。

参考文献

- 阿部美帆・今野裕之 2007 状態自尊感情尺度の開発 パーソナリティ研究, 16, 36-46.
- A・バンデューラ(編著) 1997 本明寛・野口京子(監訳) 激動社会の中の自己効力 金子書房
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋(編) 1992 セルフエスティームの心理学—自己価値の探求 ナカニシヤ出版
- 経済産業省 2007 「社会人基礎力」育成のススメについて～社会人基礎力育成プログラムの普及を目指して ニュースリリース
- 経済産業省 2010 社会人育成の手引き—日本の将来を託する若者を育てるために 河合塾
- 国立教育政策研究所編 2007 生きるための知識と技能3 OECD生徒の学習到達度調査(PISA) 調査国際結果報告書 ぎょうせい
- 松永修一 2010 エンロールマネジメントとしての学生自律化キーイベントの効果について 児童教育実践研究, 3(2), 77-88.
- 森谷寛之・杉浦京子 1999 現代のエスプリ コラージュ療法 至文堂
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子 1995 特性的自己効力感尺度の検討——生涯発達の利用の可能性を探る 教育心理学研究, 43, 306-314.
- Rosenberg, M 1965 Society and the adolescent self-image. Prinston Univ. Press
- Sherer, M., Maddux, J.E., Mercandante, B., Printice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R.W. 1982 The self-efficacy scale: Construction and validation. Psychological Reports, 51, 663-671.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

付記

本研究にご協力下さったリーダーズキャンプ参加者の皆さん、就職支援企画委員の先生方、キャリアセンターの職員の皆様に心から感謝いたします。